

- 1 七日粥すすり汽笛が鳴り止まず
- 2 親離れ子離れ高度を上げよ凧
- 3 弟よ我ら一対の蝶の翅
- 4 朧夜のプールに漂う姉の髪
- 5 最終章に雲雀は羽をたたみけり
- 6 薊咲くかのファシストの鼻下に
- 7 相槌が眠たき蝶を呼びにけり
- 8 肉体やところで綿毛はいつ飛ぶの
- 9 仏壇にバナナの反りの涅槃かな
- 10 公園の椿に黙秘権はない
- 11 春や水底に青年期を沈め
- 12 酔狂の二月の自動販売機
- 13 笹鳴をいちまいいちまい脱いでゆく
- 14 鬱の字をしやくとり虫が横断す
- 15 四捨五入すればおたまじゃくしに足
- 16 臍の緒を手繰れば花野絶てば街
- 17 待春のサイコロを振るそして鳴る
- 18 火薬庫や蝶に充ちゆく花の蜜
- 19 たいやきにうらおもてなし風光る
- 20 もくれんに傘を忘れた人は誰
- 21 ぜんまいはおとぎ話に群生す
- 22 花嫁は婿よりノッポつくしんぼ
- 23 ランボーのうしろのしょうめん沈丁花
- 24 鍵穴の中で蠢く春の闇
- 25 春眠の鼻は墓標として立てり
- 26 啓蟄や手塚治虫はベレー帽
- 27 相槌のすこし遅れる春の闇
- 28 耳打ちに吐息は蛇となり潜る
- 29 ピスタチオ割る夕立の気配かな
- 30 大きめの靴で夏野を歩きけり
- 31 蝸や首から老いてゆく女優
- 32 向日葵に抱擁の術教授せり
- 33 嘲笑を聴かぬふりして冷奴
- 34 落第の蚊取線香かもしれぬ
- 35 抱擁をするりと抜ける水母かな
- 36 沈みゆく父滝壺に轟けり
- 37 実験用猿脱走中聖五月
- 38 膨張の宇宙さておき扇風機
- 39 炎天にレールが伸びて無一文
- 40 葉桜を受難としたる男かな
- 41 椰子の実を抱く妹の海があり
- 42 逡巡に海月浮かべる遊びかな
- 43 向日葵の萎れる音を聴きにゆく
- 44 乱世の蛍よ瓜を嗅ぎにこい
- 45 麦わら帽に喰われてしまう男かな
- 46 蝉の死に木琴かるく鳴らしけり
- 47 秋風の郵便配達員の野望
- 48 かなかなに円周率を問うてみる
- 49 山芋にたらす醤油の白昼夢
- 50 欠伸してドスツと愁思打ち込まれ

- 51 巫女さんがはばたきやまず暮の秋
52 秋夜風猿は余白を舐めにけり
53 耳搔きは銀河に最も近いもの
54 麦の秋回転木馬の音たてて
55 暮秋とは二重まぶたのことですか
56 銀漢のほとりにピアス落としけり
57 芥子の花ピエロの闇は口である
58 なで肩の芒の正面へとまわる
59 満月は象の受胎を告げに来る
60 くちびるは月光啜るためにある
61 母の辞書梔子かおる夜に開く
62 存命の案山子をふかく泥に刺す
63 月光の照らし忘れし三輪車
64 鳩胸に白桃の水みたさんと
65 カエサルの巻き毛荒野をゆく野分
66 鑑識にだすまでもない糸瓜かな
67 靴篋は秋の高さに掛けてある
68 どんぐりに凭れる夕餉の時間まで
69 梵字みな秋夕暮のかたちして
70 電脳に誤字はあらずやみみず鳴く
71 ぼこぼこと湧く月光とナタデココ
72 雪嶺のどこかに兎いて孤独
73 刀狩或は雪のホツチキス
74 蛇ねむる修正液につぶす誤字
75 耳削ぎの鼻削ぎの山眠りけり
- 76 凍蝶に木っ端微塵の想いあり
77 蓑虫を吹きて日本列島よ
78 ふくろうを逆さまにして帰りけり
79 とりあえず舌で受け取る牡丹雪
80 ラグビーの骨軋みあう霜柱
81 消しゴムの弾力冬の父の口
82 唇を枯らしてゆくは狐火か
83 木枯はウイスキー瓶の中にある
84 爆心地出て鳩の目がまだ赤い
85 ある葬儀ピアノの口があいている
86 即席麺すするカモメの背中かな
87 お歯黒は滅びコーヒー啜るかな
88 ペんぎんとかしかりのないあいだから
89 寒月を油揚げにて包みます
90 冬白昼ステイックシュガー的ねむけ
91 ゆでだこの反発力を利用せよ
92 産声は渚に埋めたはずなのに
93 三島忌の時計の針が閉じてゆく
94 重力を胎児と分かつ昼の月
95 今生の影を磨いておりにけり
96 靴篋になり損ねたるサーベルよ
97 人肌に温めてあげる文庫本
98 かの鬼は双眼鏡の中で笑む
99 炉心熔融蜂蜜をたらす夜に
100 ギター搔く第六弦は父であり